

子どもの Reading for Pleasure 研究の特徴 ー システマティック文献レビュー ー

板橋 奈央

子どもの読書習慣の育成の文脈で、イギリスやアメリカを中心に、近年“Reading for Pleasure (RfP)”という概念が注目されている。RfPとは、日本語で「楽しみのための読書」と訳されるが、その概念の曖昧さから、日本国内の読書研究と結び付けられることは少ない。

本研究の目的は、21世紀のRfPに関する研究を整理し、RfP研究の特徴を体系的に明らかにすることである。また、RfPという概念が表す具体的な読書形態を探ることを目指す。

本研究では、21世紀に発表されたRfPに関する研究のシステマティック文献レビューを行い、RfPの定義や研究結果についての内容分析と、対象文献の研究手法、調査対象国、著者、学問領域についてトレンド分析を実施した。図書館情報学領域のデータベース(LISA)を用いて探索し、選定した結果、最終的な分析対象文献は44件となった。

調査の結果、RfPという読書形態は、「自由な時間に自由な場所で、自分が選択した本を読む」ことを中核的要素とする読書であり、こうした読書は楽しみや満足感を伴うものと暗黙的に理解されていることが示唆された。また、RfP研究が着目する点は「子どもの読書行動」、「教師の育成と読書教育政策」、「施策・実践」、「効果」の4つであり、調査対象国の状況や課題によって着目される点にも特徴が見られた。さらにRfP研究のトレンドとして、研究方法では質問紙調査とインタビューを中心としつつ、近年は大規模縦断調査のデータを用いた二次分析や質的分析の増加が見られた。調査対象国は特にイギリス、アメリカ、オーストラリアを中心に、南米・アフリカ・アジアにまで及び、英語圏外でもRfPの概念が広まっているが、一部の国ではRfP研究は見られておらず、日本における「自由読書」など、その国の公用語でのRfPに代わる類似概念が存在することやRfPよりも別の類似概念の方が一般的である可能性が考えられる。共著が多く見られるが、学校教師と大学所属の研究者や、複数国の研究者の協働による研究が不足していることがうかがえた。今後は、研究者が教師との協同による現場に即した研究や、国をまたぐ研究者の協同による国際比較研究の拡大が期待される。RfP研究は特に教育学の視点から研究が行われてきたが、近年では別の領域の研究者からも注目されていることがわかった。教育学以外の視点からの研究の発展により、特にRfPの「効果」に関する包括的理解が進むと考えられる。

本研究を通して、RfP研究の研究手法の変遷、調査対象国や学問領域の広がり、国を跨ぐ共著の発展が明らかになった。現在、日本の読書研究のほとんどはRfPという概念とは結び付けられていないが、本研究で明らかにした定義を適用することによって日本の読書研究の一部はRfP研究として位置づけることができることが示唆される。

(指導教員 小泉 公乃)